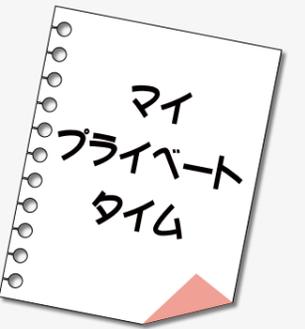


音楽とともに生きる

札幌市長(北海道) 上田文雄
Fumio Ueda



文化・芸術の薫りあふれる街

札幌の街は、さまざまな場所で文化活動や芸術に触れることができます。例えば、世界の大都市の中では最も降雪量が多い北国の冬の暮らしを守るため、札幌には地下鉄や地下通路など地下空間が整備されていますが、莫大な費用と労力をかけて創ったこの地下空間は、札幌市民にとって最大の財産です。だから、通路としてだけ使うのではなく、市民のパフォーマンスや芸術としてさまざまな情報の発信の場として活用しよう。通路全体を常設美術館とする「500m美術館」(世界一細長い美術館)を開設する施策は、こうした発想によるものです。

また、冬が厳しい一方、短い夏を謳歌するように、夏の札幌はイベントが目白押しです。7月の声を聞くとすぐ、20世紀の大音楽家レナード・バーンスタインが



オペラを歌う筆者

楽団(札幌)を応援する活動を始めました。96年からは札幌市が音楽専用ホール「キタラ」を翌97年に開館するに際して「キタラの2008席を聴衆でいっぱいしよう」と、札幌唯一の公認ファンクラブ「札幌くらぶ」を立ち上げ、札幌の活動を支援し聴衆を増やす活動を続けてきております。ヒヨんなことから03年に市長選挙に出馬することになり、政令市では初めてという再選挙(1回目は法定得票数に2万票ほど届かなかった)の末当選させていただいた際には、「NPOサポートセンター理事長」などさまざまな市民活動の職はすべて辞することにしましたが、「札幌くらぶ」の会長だけは今でも続けています。その愛すべき札幌が今年創立50周年を迎えました。このオーケストラは私が中学2年のとき、生まれて初めての生の演奏を聴いたオーケストラです。それから50年、私が音楽とともに生きるベストパートナーとなっています。

歌といえば、最近ではカラオケが全盛でどこに行っても素晴らしい画像と伴奏で歌手になれるようになり、うになり、私には84



発売されたCDアルバム

提唱して1990年から毎年開催されている教育音楽祭「パシフィック・ミュージック・フェスティバル(PMF)」が始まりました。世界中から厳しいオーディションを通じた120名ほどの若き音楽家たち(29歳まで)が楽器を抱え街を闊歩し、ウィーンフィルやベルリンフィルなどの首席奏者らによって構成される教授陣に約1カ月間みっちり指導を受け、8月上旬まで小ささまざまなコンサートが開催されます。地下歩行空間でも室内楽が奏でられ、ひと夏で4〜6万人の市民らがクラシック音楽の魅力に取り付けられます。

このPMFと時期を重ねるように、札幌の中心部、冬は雪まつりの会場ともなる大通公園には、突如白く巨大なテント張りのドーム「ホワイトロック」が出現し、「サッポロ・シティ・ジャズ(SCJ)」のメインステージが置かれます。内外から約3000名を超えるジャズ・プレイヤーが札幌に集まり、約1カ月間、街中がジャズのステージとなります。SCJ開催中の大通公園ではビアガーデンも約4週間開催され、延べ130万人の市民と観光客が爽やかな札幌の夏空の下「乾杯!」とジャズとのセッションを体感できます。こんな「真夏の夜の夢」も、8月中下旬の盆踊り大会とともに終わりを告げ、季節は涼しくも短い実りの秋へと移り変わっていくのです。9月半ばから、姉妹都市ミュ

年にレコード(EP版)、96年にCDアルバム「Japanese KENPO」※注「あじさい」そして05年には「ふるさと札幌」という歌手としてのCD作品がございます。いずれも5000枚から7000枚ほど売れ制作費は回収できる程度ではありませんが、とにかく売りのCDです。(興味のある方は私のHP <http://www.uedafumio.jp/cd.html>にアクセスしていただければ、タグ!!でお聴きいただけます)

(※注 日本国憲法第9条の条文をジャズ・ロックにして歌ったもの)

すべてがそろった完璧な舞台

音楽とまちづくりを考えると、今の札幌があるのは、これまでかかわった先人の並々ならぬ努力の成果であると思います。が、もし、この世に女神がいるのなら、札幌に微笑んだとしか思えない偶然もあったのではと感じます。1961年に発足した札幌交響楽団が世界レベルへと大成を遂げたこと。90年、レナード・バーンスタイン氏が晩年構想していた教育音楽祭PMFの開催地に札幌を選んだこと。その選択に応えるように97年、世界有数の音質を誇る音楽専用ホール「キタラ」を持つことができたこと。タイミングといい、内容といい、どれ1つ欠けても今の札幌は、こうはなっていないかっただけでしょう。

「キタラ」は本当に素晴らしいホールで

ンヘン市のオクターバーフェストに触発され、北海道中のうまいものが大通公園で楽しめるオクタムフェストが始まり、ビールとワインの日々が3週間ほど続きます。

私と音楽とのかわり

さて、こんな素晴らしい音楽・芸術・文化を大切にしてきた192万都市の市長職を預かる私の方とえば、音楽なら、ジャンルを超えて聴くのも歌うのも大好き人間です。しかし、実は小学生の時は音痴で、母からは「人前で絶対に歌などは歌わないように」と厳にしつけられておりました。学校の成績もほかの教科はそこそこの評価を受けておりましたが音楽と図画だけは「3」でした(たぶん「3」は先生のお情けで、本当は「1」だったのでしょう)。ところが小学5年生のころ、劇的に声変わりし、さなごが蝶になつたが如く、突然良い響きと狙った音程の声が出るように大変身を遂げたのです。それ以来、音楽が大好きになつてしまい、クラシックを聴き、プラスチックバンドでトランペットを鳴らし、合唱部でテノールを張り上げる、と音楽大好き人生を歩むこととなります。

社会に出て、法律家となつてからも混声合唱団に所属して、パレストリーナのミサ曲などを歌い続け、1978年に札幌に来てからは、男声合唱団にてバリトンをバリバリ歌い、地元オーケストラの札幌交響隊。PMFの04年、06年の首席指揮者として来札されたワレリー・ゲルギエフ氏は「キタラ」の音響の素晴らしさに感動し、サントペテルブルグに「キタラ」と同じ音響設計によるコンサートホールを造ってしまわれたほどです。また、先日、今年のPMFに参加されたバリトン歌手のトーマス・ハン普森氏も、「たいへん歌いやすい、奇跡の響きだ」と絶賛されました。私も男声合唱団「ススキノ」でこの大ホールで歌ったことがあります。聴衆との一体感が素晴らしく、演奏家にとっても聴衆にとってもかけがえのない音楽空間がそこにはあります。「キタラ」の評価が高いのは、設計だけではなく、そこで練り上げられる素晴らしい演奏そして鍛えられた聴衆の温かい高質な拍手も含めて、ということかもしれません。

音楽は、演奏する人と聴く人の両方を幸せにするウィーンウィーンのステキな芸術です。すべてがそろった完璧な舞台札幌で、名演奏を聴けるとともに、市長として舞台裏を支える機会をいただけたことに、私も誇りと幸せを感じます。音痴だった少年が、音楽青年(中・高年?)へと成長し、市長として、また、PMFを運営する財団の理事長として、札幌の音楽・芸術・文化を発展させる職責の重さとともに、音楽少年としてのワクワク感を同時に感じているのです。